

報告

精神看護学実習におけるプロセスレコードを通じた 自己理解と他者理解の学び

長谷川陽子¹，浅野均²，上原真紀³

¹つくば国際大学医療保健学部看護学科

²茨城キリスト教大学看護学部看護学科

³つくば国際大学医療保健学部看護学科

【要 旨】

目的：コロナ禍における精神看護学実習の期間短縮の中で、プロセスレコードを通して得られた自己理解、他者理解の学びを明らかにする。

方法：A大学で精神看護学実習に参加した4年生46名の記載したプロセスレコード60件をテキストマイニングの手法を用いて分析した。

結果：〈学生のわたしがわかったこと・わからなかったこと〉の共起ネットワークは14のサブグラフが、〈全体評価〉の共起ネットワークでは10のサブグラフが示された。頻出語は「患者」が1番多く、患者との対応を通して場面全体を俯瞰し、患者に関心を寄せつつ、自己との相互作用を振り返っていた。

結論：学生は患者の反応に焦点を置きながらリフレクションし、自己のコミュニケーションの傾向や対応を考察し自己理解の視点を持つことができていた。自己理解の視点が相互作用のリフレクションへつながり、患者の置かれている状況や背景に視野を広げ、他者理解の視点につながっていた。

キーワード：自己理解，他者理解，プロセスレコード，テキストマイニング，精神看護学実習

I. 序論

平成25年より精神疾患が5疾病に加わり、入院患者数は減少傾向である一方、精神疾患を有する総患者数は約503.1万人（令和2年10月）

で外来患者数は増加傾向にある（厚生労働省，2020）。多様な医療の現場においてメンタルヘルスの問題や精神疾患を抱えた対象に関わるものが予測され、看護職を目指すものとして精神疾患を抱える対象を理解していくことは重要な課題である。しかし、日常生活で精神疾患を抱える対象と接する経験が少ない学生は、対象に対するイメージの情報源として、テレビや新聞などのマスメディアの影響力が強いと考えられており、ネガティブなものが大多数であると言われている（宮武他，2022）。その否定的なイメージから、対応に不安や恐怖心を抱く傾向が

連絡責任者：長谷川陽子

〒310-8585 茨城県水戸市見和1-430-1

常磐大学看護学部看護学科

TEL: 029-232-2511

FAX: 029-232-2963

E-mail: y-hasegawa@tokiwa.ac.jp

あり、精神看護学実習に対する緊張度が高い（山下他，2016）とも言われている。また近年、若い世代における人間関係の希薄化や看護職員に対するコミュニケーション能力の不足の指摘もあり、看護基礎教育においても、コミュニケーション能力の向上のための教育の一層の強化が必要と言われている（厚生労働省，2019）。精神看護学実習に対する緊張度が高い学生にとって精神疾患を抱える対象とコミュニケーションをとり人間関係を構築することは、困難な学習課題であると言える。

2019年に発生した新型コロナウイルス感染症の影響を受け、看護基礎教育では対面での講義や演習に加え、臨地実習に大きな制約を受ける状況となった。A大学の精神看護学実習では5日間の病棟実習とデイケア等の施設実習を組み合わせで行ってきたが、2022年度は病棟実習が半日を3日間へ変更となり、その中で1人の患者を受け持ち、看護を展開することとなった。対象と関わる時間が減少したことで、臨地での実習時間内に対象理解を深めることや患者－看護師関係を築くことが困難な状況であった。精神看護の実践においては、対象を知性的理解と感性的理解の両側面から理解していくことが重要となる。自己洞察を深め、自己理解を促すとともに他者理解を深めるためのツールとして、プロセスレコードがあり、学習者はプロセスレコードを【深める自己理解と他者理解】のために活用していると言われる（松丸他，2021）。精神疾患を抱える対象との関わりでは、悩みを打ち明けられたり、日常で接する機会の少ない妄想や幻聴などの精神症状に対する対象の発言に直面し、学生はその関わりに困難を抱くこと、そのような言動にどう対処すべきかに関心が向いていることは先行研究で明らかにされている（三原と夢喜田，2001）が、学生自身の自己理解と他者理解の学びに焦点をあてて報告された研究は少ない。

患者－看護師関係の構築につながる効果的な教育に役立てるための手がかりとして、本研究では、精神看護学実習で看護学生が記載したプ

ロセスレコードを通して得られた自己理解と他者理解（対象理解）に関する学びの具体的内容を明らかにすることを目的とした。

II. 方法

1. 研究対象

A大学の精神看護学実習を2022年4月から2022年8月にかけて履修し、研究協力の有無が成績に影響しないことを担保するため成績が確定している看護学科4年生69名のうち、研究協力の同意が得られた46名の学生が記載したプロセスレコード60件を研究対象とした。

2. プロセスレコードの概要

1) 精神看護学実習の実習方法

精神科病院または精神科病棟の閉鎖病棟または半閉鎖病棟で、午前半日を3日間、患者を1名受け持ち、対象理解に重点をおいて看護展開を実施した。

2) プロセスレコードの記載

学生は受け持ち期間3日間の中で、受け持ち患者との対応で気になった場面、心に引っかかっている場面について、意図的に場面を選定したプロセスレコードを任意で1～2枚記載することとした。

プロセスレコードの記載内容は「受け持ち患者の疾患名」、「性別」、「実習経過日数（受け持ち何日目か）」、「場面の状況」、「この場面を取り上げた理由（何を明らかにしたいのか）」、「患者の言動（言語的・非言語的）」、「その時の学生のありのままの気持ち」、「学生が実際に言ったこと・行ったこと」、「学生のわたしがわかったこと・わからなかったこと」、「全体評価（どのような気づきが得られたか）」である。

3) 分析対象

プロセスレコードの記載内容のうち、受け持患者の概要として「疾患名」、「実習経過日数（受け持ち何日目か）」を抽出した。分析対象として「学生のわたしがわかったこと・わからな

かったこと」「全体評価（どのような気づきが得られたか）」の欄に記載された内容をそれぞれ文章で抽出した。

3. 分析方法

1) 受け持ち患者の概要

対象者の受け持ち患者の概要については、単純集計を行った。

2) プロセスレコード記載内容の分析

プロセスレコードの「学生のわたしがわかったこと・わからなかったこと」と「全体評価：どのような気づきが得られたか」に記載された文章を電子テキスト化し、テキストマイニングの手法を用いて内容分析した。「学生のわたしがわかったこと・わからなかったこと」の記載欄では、「わかったこと」と「わからなかったこと」の区別はない。今回は学生が「わかった」または「わからなかった」ことの具体的内容を明らかにすることではなく、プロセスレコードの記載を通して気づいた視点を明らかにするため、区別せずに分析した。

分析にはフリーソフトウェア KH Coder ver.3. Beta.07f を使用し計量テキスト分析を行った。計量テキスト分析とは、計量的分析手法を用いてテキスト型データを整理または分析し、内容分析（content analysis）を行う方法である（樋口, 2021a）。

分析の手順は、まずテキストのチェックによる自動修正を行い、強制抽出する語として「病識」「信頼関係」「対処行動」「気持ち」「気づく」「可能性」を指定し、前処理を実行した。テキストマイニングには記載された文章を単語に分割し、頻出語の集計、共起ネットワーク分析を実施した。共起ネットワーク分析では最小出現数 5、最小文書数 1、描画数 60 の語とし、最小スパニングツリーのみを表示した。比較的強くお互いに結びついている部分を自動的に検出してグループ分けを行い、その結果を「サブグラフ」と呼ばれる色分けによって示した（樋口, 2021b）。その後、データの中で語がどのように使われているのか KWIC コンコーダンスを

用いて前後の文脈を確認した。分析の妥当性を高めるため、共同研究者間で合意が得られるまで討議を重ねた。

以下にそれぞれの分析の概要について述べる。頻出語の集計とは、文章の中に多く出現している語をリストアップし集計することであり、動詞・形容詞・形容動詞などの活用を持つ語はすべて 1 種類の語としてカウント・抽出される。共起ネットワークとは、語の出現パターンが似通ったグループを可視化するために、共起する語を線で結んだネットワークで、お互いに強く結びついている部分ごとにグループ分けを行ったものである。語句の円の大きさは語句の出現回数を表し、円が大きいほど出現回数が多く、語句を結ぶ線は強い共起関係になるほど濃く示されている。Jaccard 係数は 0 から 1 までの値を取り、関連が強いほど 1 に近づく（樋口, 2021c）。

4. 用語の操作的定義

自己理解

対象との関わりの中で自分自身の感情や言動を振り返り、自己の価値観や感情、思考、言動の特性、パーソナリティに対する気づきを得、自己を客観視すること。

他者理解

対象との関わりの中で起こった出来事を共感する姿勢を通して相手の立場で考え、対象の感情や価値観、思考、言動について考察し、関心をもって理解しようとすること。

5. 倫理的配慮

研究対象者に研究目的、研究協力は自由意思により随時撤回が可能であること、協力拒否による不利益は生じないこと、個人情報保護を遵守すること、得られたデータは統計的に処理して個人が特定できないように分析すること、その後に廃棄されること、研究結果を学会等で発表すること、必要があれば記載したプロセスレコードを確認し、データとして用いて欲しく

ない部分がある場合は申し出ることができること、研究責任者と問い合わせ先について、文書と口頭で説明し、同意書の提出をもって同意が得られた学生のプロセスレコードを分析対象とした。

本研究は、つくば国際大学倫理委員会にて承認を受けた（承認番号 R 04-13 号）。

Ⅲ．結果

1. 受け持ち患者の概要

受け持ち患者の疾患名は、統合失調症 34 名（うち双極性気分障害との合併 2 名）、気分障害（うつ）20 名、気分障害（双極性）5 名（うち統合失調症との合併 2 名）、知的障害 2 名、認知症 1 名であった。

プロセスレコードを記載した時点での実習経過日数（受け持ち何日目か）は、1 日目が 6 名、2 日目が 23 名、3 日目が 31 名であり、32 名の学生が 1 枚、14 名の学生が 2 枚プロセスレコードを記載していた。2 枚記載した学生は、実習経過日数 2 日目と 3 日目に記載が 8 名、1 日目と 3 日目が 4 名、1 日目と 2 日目が 1 名、2 日目に 2 枚が 1 名であった。

2. プロセスレコードの記載内容：学生のわたしがわかったこと・わからなかったこと

記載内容の文章数は 306 文で、総抽出語数は 7598 語、うち使用した抽出語は 2828 語であった。抽出語のうち、頻出語上位 50 語を表 1 に、頻出語の共起ネットワーク分析を図 1 に示す。以下得られた抽出語は〈 〉、サブグラフに著者らが割り当てたタイトルを《 》で示した。また共起ネットワークの分析結果だけを見て、語の意味やデータの中のテーマを勝手に想像していると、ひどい勘違いをしてしまう恐れがあり、データの中で語がどのように使われているのかという、前後の文脈を確認しながら解釈は行わなければならない（樋口, 2021c）ため、学生が記載した原文の内容を『 』の斜字と表 2 に示す。『 』前の番号は表 2 の記載内容に付与した番号に対応している。

頻出していた語は〈患者〉85 回、〈話〉67 回、〈聞く〉51 回、〈思う〉44 回、〈分かる〉40 回、〈自分〉37 回、〈質問〉37 回の順であり、〈患者〉の〈話〉を〈聞く〉ことに関する語が多く、〈自分〉は〈患者〉の半数以下であった。

共起ネットワークでは、14 のサブグラフが示された。01 サブグラフは頻出語上位 1 位〈患者〉から 5 位〈わかる〉までを含み、《患者と

表 1. 「学生のわたしがわかったこと・わからなかったこと」の頻出語上位 50

頻出語	出現回数	頻出語	出現回数	頻出語	出現回数
患者	85	少し	14	笑顔	9
話	67	答える	14	相手	9
聞く	51	発言	14	目	9
思う	44	理解	14	可能性	8
分かる	40	気持ち	13	遣う	8
自分	37	知る	13	行く	8
質問	37	話題	13	他	8
考える	36	見る	12	内容	8
話す	31	時間	11	反応	8
良い	28	出来る	11	表情	8
言う	24	コミュニケーション	10	夢	8
会話	17	違う	10	意欲	7
気	17	症状	10	好き	7
伝える	17	変える	10	困る	7
言葉	15	返答	10	自身	7
感じる	15	学生	9	人	7
妄想	15	行動	9	声	7
				入院	7
				返す	7

数値は出現回数。

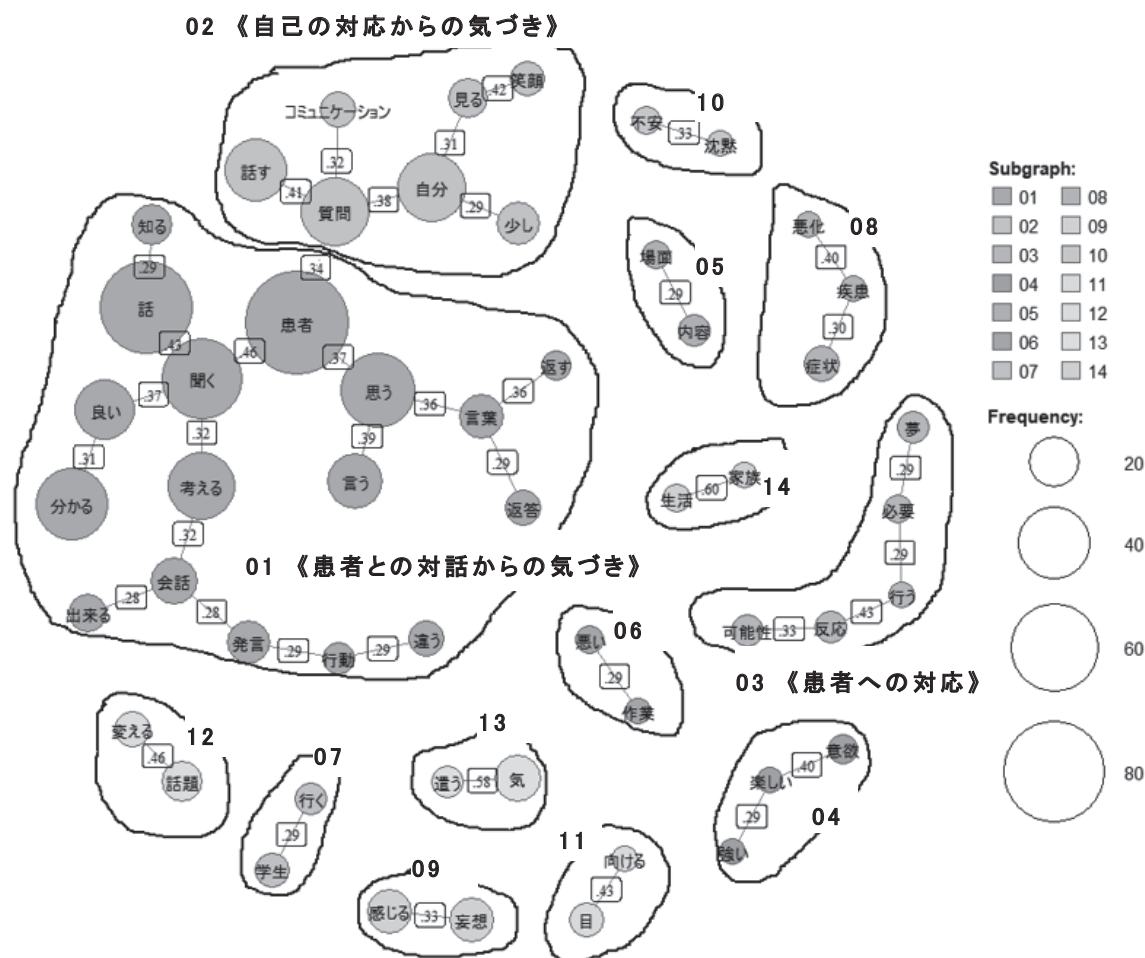


図1. 〈学生のわたしがわかったこと・わからなかったこと〉の共起ネットワーク図

*線上の数値は Jaccard 係数を示す

*番号はサブグラフの番号を表し、《 》内は著者らが割り当てたタイトルを示す

の対話からの気づき》が示され、Jaccard 係数は 0.3 以上であった。記載内容では①『なぜそう思ったのか患者自身の気持ちは聞かずに、自分で解釈し話を進めてしまっていた』②『またどのように聞いたら良かったのだろうか』③『どこまで踏み込んだことを聞いていいのかわかっていなかったため、幻聴についての話を避けてしまった』④『この場面でも幻聴が聞こえていた可能性がある』等があった。

02 サブグラフでは、頻出語 6 位の〈自分〉と〈質問〉、9 位の〈話す〉等に共起関係がみられ、Jaccard 係数は 0.3 以上であり、《自己の対応からの気づき》が示された。記載内容では⑤『自分から質問することが多く、質問攻めになってしまった』⑥『答えにくく、困ってしまうことがあるため、細かく答えやすい質問をし

ていく必要があることがわかった』等があったが、患者を自分と表現した⑦『内気で人付き合いが苦手であるため、自分から話すのが難しく、言葉がつまってしまうことがあることがわかった』もみられた。

03 サブグラフでは、頻出語 38 位の〈可能性〉〈反応〉や〈行う〉などに共起関係がみられ、Jaccard 係数は 0.3 以上であり、《患者への対応》が示された。⑧『どのように反応すれば良いのか分からなかった』⑨『新聞を読んでいる中で声をかけて質問を行って良かったのか』等があった。

その他 04 から 14 サブグラフは 2 語から 3 語の共起関係がみられ、13 サブグラフでは〈気〉〈遣う〉で Jaccard 係数 0.58 の高い共起関係があり、14 サブグラフでは〈生活〉〈家族〉に

表2. プロセスレコードの記載内容（原文一部抜粋）

1. 学生のわたしがわかったこと・わからなかったこと

サブグラフのタイトル	記載内容
01) 患者との対話からの気づき	①なぜそう思ったのか患者自身の気持ちは聞かずに、自分で解釈し話を進めてしまっていた
	②またどのように聞いたら良かったのだろうか
	③どこまで踏み込んだことを聞いていいのかわかっていなかったため、幻聴についての話を避けてしまった
	④この場面でも幻聴が聞こえていた可能性がある
02) 自己の対応からの気づき	⑤自分から質問することが多く、質問攻めになってしまった
	⑥答えにくく、困ってしまうことがあるため、細かく答えやすい質問をしていく必要があることがわかった
	⑦内気で人付き合いが苦手であるため、自分から話すのが難しく、言葉がつまってしまうことがあることがわかった
	⑧自分から話すときは笑顔が見られた
03) 患者への対応	⑨どのように反応すれば良いのか分からなかった
	⑩新聞を読んでいる中で声をかけて質問を行って良かったのか

2. 全体評価(どのような気づきが得られたか)

サブグラフのタイトル	記載内容
01) 反応を捉えることでの学び	⑪患者の表情や言動などからどんな思いで話しているのか観察しつつ、会話を進めていけたら良かった
	⑫患者の反応や表情を観察しながらコミュニケーションをとり、少ししんみりした流れになってしまうと話題をずらしてしまう傾向が私自身あると感じた
	⑬患者が言ったことをオウム返ししたり、うなずいたり、沈黙の時間を作ることで患者から話してくれるところがあった
02) 学生が理解した患者の背景	⑭患者の言動にも触れた発言をしてみることや患者の言葉からどのような思い、意味があるのか拾えるようにして、その部分に焦点を当ててみるのが対象理解へ繋がると学んだ
	⑮次々に質問してしまっただが、沈黙は考えがまとまっていなく、少し時間がかかっているだけの可能性もある
03) コミュニケーションを通しての学び	⑯精神科にいる人といった偏見を持ちすぎていたことから、コミュニケーション時に身構えすぎてしまっていたのではないかと気づいた
	⑰踏み込むことができる内容は踏み込めるが、出来ない内容はスルーして、その話に触れないようにしている傾向があると感じた
04) 患者と自己の相互作用からの学び	⑱自分と患者の捉え方の違いについてとても考えるきっかけとなった
	⑲自分は、相手がどう思っているかやどう考えるかなどを考えすぎてしまう傾向がある
	⑳自分の感情を相手に伝えることで、相手も感情を表出しやすくなると感じた
	㉑患者とのコミュニケーションを通して私は、会話の内容を選んで話していると気づいた

Jaccard 係数 0.60 の高い共起関係がみられた。

3. プロセスレコードの記載内容：全体評価 （どのような気づきが得られたか）

記載内容の文章数は 217 文で、総抽出語数は 7358 語、うち使用した抽出語は 2796 語であった。抽出語のうち、頻出語上位 50 語を表 3 に、頻出語の共起ネットワーク分析を図 2 に示す。

頻出していた語は〈患者〉が 107 回と突出しており、次いで〈考える〉58 回、〈自分〉と〈話〉54 回、〈聞く〉51 回、〈質問〉40 回、〈気づく〉38 回、〈話す〉36 回、〈相手〉35 回の順であった。共起ネットワークでは、10 のサブグラフが示された。

01 サブグラフでは頻出語上位 14 位〈大切〉や〈分かる〉〈表情〉〈観察〉等が共起しており、《反応を捉えることでの学び》に関する語句が示され、〈表情〉と〈観察〉の Jaccard 係数は 0.40 であった。⑩『患者の表情や言動などからどんな思いで話しているのか観察しつつ、会話を進めていけたら良かった』⑪『患者の反応や表情を観察しながらコミュニケーションをとり、少ししんみりした流れになってしまうと話題をずらしてしまう傾向が私自身あると感じた』⑫

『患者が言ったことをオウム返ししたり、うなずいたり、沈黙の時間を作ることで患者から話してくれるところがあった』等があった。

02 サブグラフでは、〈理解〉や〈少し〉に共起関係がみられ、《学生が理解した患者の背景》に関する語句が示された。⑬『患者の言動にも触れた発言をしてみることや患者の言葉からどのような思い、意味があるのか拾えるようにして、その部分に焦点を当ててみることで対象理解へ繋がると学んだ』⑭『次々に質問してしまっただが、沈黙は考えがまとまっていなく、少し時間がかかっているだけの可能性もある』などの記載があった。

03 サブグラフでは頻出語上位 11 位の〈感じる〉、13 位〈コミュニケーション〉を含み、《コミュニケーションを通しての学び》に関する語句が示され、〈話題〉と〈変える〉の Jaccard 係数は 0.33 であった。⑮『精神科にいる人といった偏見を持ちすぎていたことから、コミュニケーション時に身構えすぎてしまっていたのではないかと気づいた』⑯『踏み込むことができる内容は踏み込めるが、出来ない内容はスルーして、その話に触れないようにしている傾向があると感じた』等があった。

表 3. 「全体評価（どのような気づきが得られたか）」の頻出語上位 50

頻出語	出現回数	頻出語	出現回数	頻出語	出現回数
患者	107	妄想	17	行う	9
考える	58	理解	17	捉える	9
自分	54	分かる	15	踏み込む	9
話	54	多い	13	人	9
聞く	51	少し	13	言動	8
質問	40	気	13	様子	8
気づく	38	表情	12	行動	8
話す	36	声	12	出来る	8
相手	35	言葉	11	学生	7
思う	33	自身	11	思い	7
感じる	32	情報	11	内容	7
会話	30	話題	11	生活	7
コミュニケーション	28	今回	11	沈黙	7
大切	25	知る	11	返答	7
必要	21	可能性	10	今後	7
伝える	20	変える	10	場合	7
言う	19	傾向	9	見る	7
気持ち	18	観察	9	答える	7
発言	18	不安	9	得る	7
良い	18	学ぶ	9		

数値は出現回数。

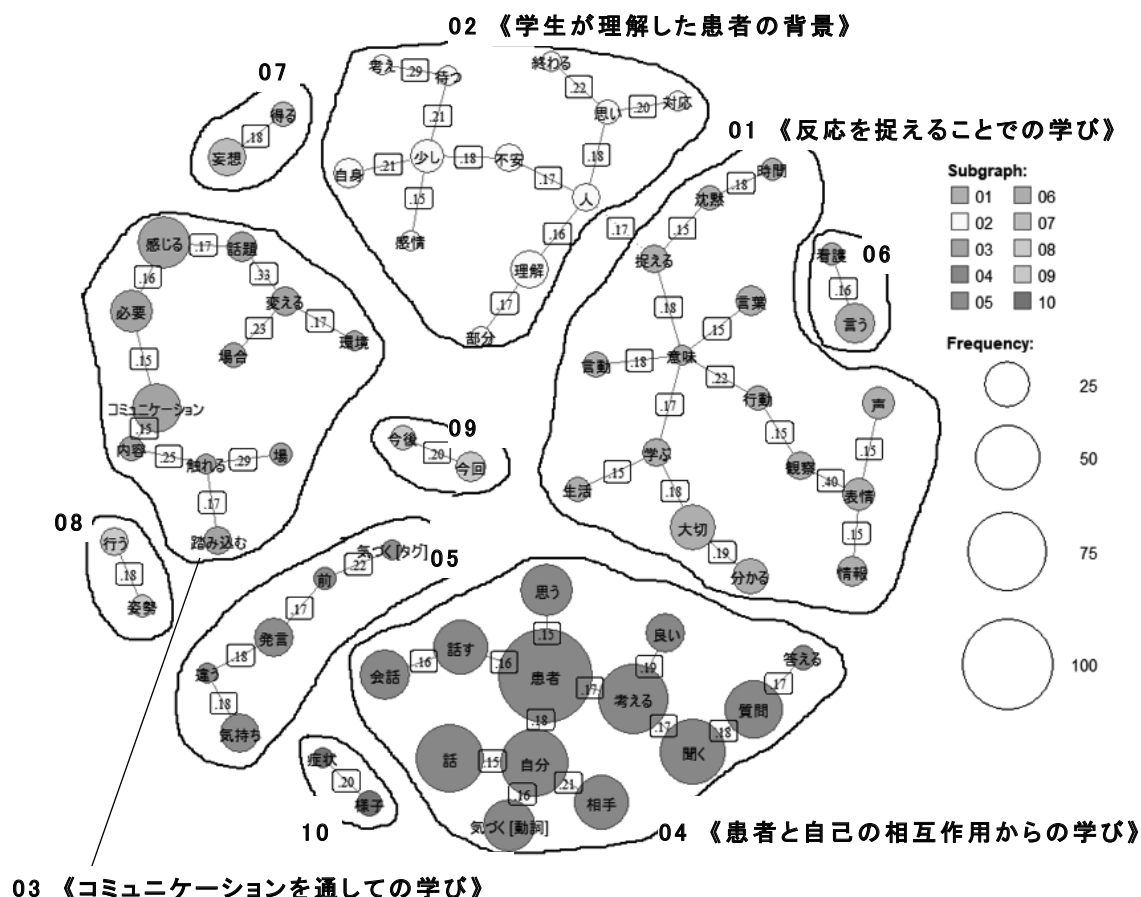


図2. 〈全体評価（どのような気づきが得られたか）〉の共起ネットワーク図

*線上の数値は Jaccard 係数を示す

*番号はサブグラフの番号を表し、《 》内は著者らが割り当てたタイトルを示す

04 サブグラフは頻出語上位1位〈患者〉から10位〈思う〉までを含み、《患者と自己の相互作用からの学び》を示しており、3位の〈自分〉と9位〈相手〉の Jaccard 係数は0.21であった。記載内容として⑰『自分と患者の捉え方の違いについてとても考えるきっかけとなった』⑱『自分は、相手がどう思っているかやどう考えるかなどを考えすぎてしまう傾向がある』⑲『自分の感情を相手に伝えることで、相手も感情を表出しやすくなったと感じた』⑳『患者とのコミュニケーションを通して私は、会話の内容を選んで話していると気づいた』等があった。その他05から10サブグラフは2語から5語の共起関係がみられていたが、Jaccard 係数はすべて0.22以下であった。

IV. 考察

1. 自己理解に関する学び

コミュニケーションの技術は、患者－看護師関係を深めるには欠かせないが、学習途上にある学生が、その技術を効果的に発揮することは難しい場合が多く、プロセスレコードなどの手法を用いて自己の特徴や心的傾向を見だし、それらが患者に及ぼす影響について考えることのできるような教育的支援が必要とされている（米元他, 2022）。今回3日間半日という実習時間の制約がある中でのプロセスレコードを通じた自己理解、他者理解に関する学びについて考察した。

今回の結果で示されたサブグラフ《患者への対応》《患者と自己の相互作用からの学び》には、対象との関わりの中での自己を客観的に振

り返る、自己理解につながる学びが反映されていた。《患者との対話からの気づき》《自己の対応からの気づき》《反応を捉えることでの学び》《コミュニケーションを通しての学び》には、対象の立場に身を置き考察する他者理解を通して、自己理解につながる学びが反映されていたと考える。

頻出語は患者が一番多く、学生の思考の中心は患者であった。困惑した思考は停止するが、そのような状況は学生が自分の対応に問題意識を持つことにもつながっている（土屋他, 2003）と言われている。また、多くの学生は無意識のうちに、患者との人間関係につまずきを覚えた場面を選び、再構成を行うことによって自分を立て直そうとしていると言われており（宮本, 2019）、プロセスレコードに取り上げる場面は、患者の予測できない反応、返答、沈黙、会話の流れ、精神症状からくる幻聴や妄想等の発言に対して自己がどのように対応してよいのかわからず困惑するなど、場面の中で起きていた現象が学生の心にひっかかったことが問題意識につながり、意図的に取り上げているため患者に焦点があたっていたと考える。

表2の①、②、③の記載内容から、患者との対話場面を振り返り、対応はどうすべきであったのか、次はどうしていけばよいのか、患者との関わりに応答している自己にも関心を向けることにつながっていたと考える。頻出語でも〈自分〉は上位であり、〈自分〉の語句には患者を自分と表現した文章もみられたが、ほとんどの文章は学生自身を指して使用されていた。

コミュニケーション技法が未熟でも連続的な過程を踏み考察に至ることができるようになること、更にその段階（考察）で患者或いは自己の一方的分析では不足であることを実感できていると言われるように（土屋他, 2003）、学生は3日間の連続的な関わりの過程でリフレクションする視野を患者から自己を含めた相互作用に拡大し考察できていたのではないかと考える。

《自己の対応からの気づき》で〈自分〉と〈質

問〉〈見る〉はJaccard係数0.3以上とやや高く共起していた。表2の記載内容⑤、⑥から、場面における自己の対応を振り返っている様子がうかがえ、また表2の⑧の記載内容から、自己とのやり取りを通して起こった患者の反応を振り返っていた。また表2の⑬、⑭、⑮、⑯の記載内容から、患者とのやりとりひとつひとつをリフレクションする過程において、リフレクションの焦点が患者の反応を引き出した自分に移行し、対話場面における相互作用の振りかえりにつながっていたと推察される。

対応に困った場面では、学生は自己の戸惑っている感情よりも対応方法に関心が向いている（三原と夢喜田, 2001）と言われている。表2の⑰の記載内容から、学生は円滑に会話を進められることが良いコミュニケーションであり、患者との関係づくりに役立つと捉える傾向があると考えられる。表2の⑨、⑩、⑪、⑬の記載内容では、今、目の前にいる患者にどのように対応すべきかについて振り返っており、その状況におかれた自己の感情の振り返りには至らず、自己が感じている感情に焦点をあてて洞察することは出来ていなかったと考える。

今回、頻出語上位50に〈異和感〉や〈不一致〉という語は入っていなかった。やりとりにおける自己の言動のずれを自覚することがプロセスレコードの目的のひとつである。プロセスレコードを通し、その時の自己の感情や反応を見つめていても、なぜそう感じたのかという深い洞察には至らなかったと報告がある（三原と夢喜田, 2001）が、本研究でも同様の結果であったと言える。場面を取り上げた時点で自己の中にある異和感や不一致を感じていたと推察され、それらに焦点を当てて言語化し表面化することで、自己理解をさらに深めるような教育的支援が必要であると考えられる。

今回の結果から自己の感情の洞察に焦点を当てることはできていなかったが、学生は患者を中心としたリフレクションの過程を通し、患者の本当に伝えたい思いは何かを探ろうとし、既習の治療的コミュニケーションを用いて患者一

看護師関係に発展させるためにどう対応するのが良かったのか方法論に視点を向け、困惑している状況にある自分に気づくことはできていた。困っている自分に気づくことは、悩んでいる患者の気持ちを理解できるとも言われており（三原と尋喜田，2001）、相手に踏み込めない自分に気づくことが、現状の自己のコミュニケーションスキルや傾向を分析することにつながり、その背景にある精神疾患や症状に対する知識不足や学習の準備不足に気づき、知性的理解につながると考える。

プロセスレコードでは【自己の対人認知への課題】を自覚でき、【プロセスレコードによる振り返りで気づいた自己の特徴と認識の変化】が生じていたと報告があるように（春田他，2022）、学生は取り上げた場面全体を俯瞰し患者に関心を寄せながら、場面の中で起きていたことの背景に自己の存在があることに気づき、相互作用の側面から場面を捉え直すことで自己の課題に気づき、得られた学びを自らの成長につなげていこうと、発展的に考えていたと考える。それらは自己理解を深めるきっかけとなると考える。

また、プロセスレコードを用いたリフレクションにより、看護者自身に生じた思考・感情を言語化・意識化し細かく検討することで、臨床ではたらくうちに半ば無意識のうちに進行してきた看護者としての規範（行動や判断の拠るべき基準）の内面化という過程を意識化させることができていた（春田他，2022）との報告がある。《コミュニケーションを通しての学び》に表2の⑯という記載内容があった。学生は〈患者〉を中心としたやり取り場面をリフレクションしながら、対応する自己のもつ偏見や価値観などの内面化を経て、自己理解につなげていたと考える。

2. 他者理解に関する学び

頻出語では〈患者〉が1位であり、学生の最大の関心は患者であることが明らかになった。サブグラフの《学生が理解した患者の背景》に

は他者理解につながる学びが特徴的に反映されており、《患者との対話からの気づき》や《自己の対応からの気づき》では、学生は患者の言動のリフレクションを通し、患者に対峙する自己の対応について考察していたと考える。一方、表2の④、⑭、⑮の記載内容があった。リフレクションする過程においてその場面で起きている相手の反応を捉え直し、患者の置かれている状況や背景に目を向け、自己と患者の双方向からの考察に発展していた。また患者の発言の裏にある思いや状況を推測し、表現された言動の意味付けを行っていることがうかがえる。自己の対応が患者に与えている影響をリフレクションし、患者の言動や反応を深く考察することにつながり、患者への興味、関心、現象の裏にある表面化されていない意図に気づくなど、感性的理解につながっていたと考える。

学生のプロセスレコードの記載傾向として、患者の言動に推測が多く、会話のみ記載し非言語的状況の記載が少ない（土屋他，2003）と言われており、頻出語でも非言語的メッセージに関する〈表情〉や〈目〉〈観察〉などの語は25位以下であった。しかし〈表情〉と〈観察〉のJaccard係数は0.40と高く共起しており、表2の⑪、⑫、⑬の記載内容から、患者の発信する非言語的メッセージに気づき、対応しながらコミュニケーションを進めていった学生もあり、プロセスレコードへの記載は少ないが、患者の発する非言語的メッセージに応答する自己の傾向や、自己の対応が患者との相互関係に与える影響を考えることで、非言語的メッセージの重要性に気づくことができていた学生もいた。

表2の⑯、⑰の記載内容から、学生は援助者としての自己の背景にある偏見に気づき、患者に一步踏み込むことに躊躇しながらも、患者のおかれている状況や思いを理解しようとする過程を通して、看護者役割として関わることの必要性に気づき、自己の課題の克服に向けて取り組もうとしていたと推察される。その取り組みが、患者理解の深まりにつながっていくものと思われ、対象理解を深めようと努力する学生の

姿がみられていたと考える。

表面上の会話のやり取りから患者の真の思いに触れることは難しく、患者に必要な看護介入を考えるためには、病識に関する話題など、さらに踏み込んだ話題へと会話を進めていく必要がある。精神疾患や症状に対応する知識や技術を学習途中の学生にとって、疾患に関する部分に踏み込むことは、症状の悪化をまねくのではないかという不安や上手く対応できない自己を露呈することへの恐れを感じると考える。不安や消極性は相手に対する否定的な思いが影響していると考えられると言われ、また学生自身が「傷つく」ことを避けるために患者との距離をおいていることも指摘されている（島途他, 2018）。患者との関わりの困難は患者理解を深めるための障壁となり、実習期間の制約のためコミュニケーションを深めることが困難であったのか、自己の持つ偏見や患者の予測不可能な応答に接することへの逃げなど、対応できなくなる自己が露呈しないよう、自己を守る行動へつながっていたのか、さらに考察を深めていく必要がある。

3日という短い期間ではプロセスレコードの記載を通して得られた学びを実践する機会がなく、患者の思いに踏み込んだコミュニケーションの実践までは到達できなかったことで対象理解の深まりが十分とは言い難いが、患者との間に関係性を築いていくプロセスの中で、看護者の視点から関わりを捉えようとしていたことが推察された。特に精神看護学実習において対象への対応に不安や恐怖心を抱き、患者とのやり取りの際に傷つくことを恐れる学生に対しては、他者理解を深めることはもちろんであるが、学生の思いに目を向けた心理的なサポートや、コミュニケーションスキルの未熟な学生に対して教員や指導者がロールモデルを示すなど関わりに対するハードルを下げるサポートが必要であると考え。患者に対する関心は向けられているが、相互作用の視点からさらに他者理解を深める支援が必要であると考え、コンテクストから深く洞察するための支援や、さらに患

者の思いに一步踏み込むための実習開始前の知識的な準備と精神疾患を抱える対象に対する否定的なイメージや偏見を軽減する教育的な支援が必要であると考え。

今回、3日間半日という短い実習期間でも自己理解、他者理解を洞察する気づきの視点を持っていたことが明らかとなり、学生は取り上げた場面全体を俯瞰し、患者との関係性の中で困難を感じている自分に気づき、自己を振り返ることができていたことが分かった。その自己理解の視点が相互作用として対象に与える影響を考察することにつながり、他者理解を深める視点が持て、患者－看護師関係構築に向けた学びへつながると考える。

3. 今後の課題

今回、分析対象数が少なく、対象疾患別や複数枚記載されたプロセスレコードの内容の追跡、個人の実習経過日数と関連させた自己理解、他者理解の学びの考察には至らなかった。実習が進むにつれ患者の背景や思考パターンの理解が深まり、対象理解も深まりをみせると考えるため、今後実習経過日数に伴う変化や対象疾患別による学びの特徴についてもデータを収集し、明らかにしていきたい。

V. 結論

1. 学生は患者の反応に焦点を置きながらリフレクションする過程を通し、患者に対峙する自己の対応に関心に向け場面を捉え直すことで自己の課題に気づき、自己理解の視点を持つことができていた。しかし、状況における自己の感情を言語化することはできていなかった。
2. 学生は自己理解の深まりから、自己と患者の双方向からリフレクションし、相互作用の考察を通して患者の内面を理解しようとし、他者理解を深める視点が持っていた。

謝辞

本研究の実施にあたり、ご協力いただきました学生の皆様と受け持ち患者の所属施設の患者様、職員の皆様に感謝申し上げます。

利益相反：本研究に関する利益相反は存在しない。

参考文献

- 厚生労働省ホームページ（2019）看護基礎教育検討会報告書. <https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf>（閲覧日：2024年1月20日）
- 厚生労働省ホームページ（2022）令和2年（2020）患者調査の概況. <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kanja/20/index.html>（閲覧日：2023年10月31日）
- 島途漠，石岡桂子，伊藤ひろ子（2018）精神看護学実習における学生の内的体験についての調査報告—プロセスレコードを用いた質的分析により—. 青森中央学院大学研究紀要. 29：57-62
- 土屋八千代，福永ひとみ，野澤由美，古家明子（2003）精神看護学実習で治療の人間関係を学ぶ—プロセスレコード記載傾向と分析検討会の評価—. 南九州看護研究誌. 1：11-21
- 春田陽子，金子美千代，小玉博子，有村優子，野中弘美，稲留直子，丹羽さよ子（2022）プロセスレコードを用いたリフレクションの意義を考える：臨床経験のある看護師のリフレクション時の気づきの分析から. 鹿児島大学医学部保健学科紀要. 32：45-54
- 樋口耕一（2021a）第1章 内容分析から計量テキスト分析へ—継承と発展を目指して. 社会調査のための計量テキスト分析《第2版》内容分析の継承と発展を目指して. 第2版. ナカニシヤ出版. 京都. 1-16
- 樋口耕一（2021b）資料A KH Coder3 リファレンス・マニュアル. 社会調査のための計量テキスト分析《第2版》内容分析の継承と発展を目指して. 第2版. ナカニシヤ出版. 京都. 115-217
- 樋口耕一（2021c）第3章 新たなアプローチによる分析の手順と実際—漱石『こころ』によるチュートリアル. 社会調査のための計量テキスト分析《第2版》内容分析の継承と発展を目指して. 第2版. ナカニシヤ出版. 京都. 31-49
- 松丸直美，平山香代子，松浦真理子（2021）臨地実習指導におけるプロセスレコードの活用に関する文献研究. 日本看護学会論文集看護管理・看護教育. 51：271-274
- 三原亜矢巳，尋喜田恵子（2001）学生が困った場面を振り返ることの学習効果—精神看護学実習におけるプロセスレコードの分析より—. 名古屋市立大学看護学部紀要. 1：63-71
- 宮武陽子，富山美佳子，五十嵐啓子（2022）精神看護学実習における精神疾患をもつ人の学生のイメージに関する文献検討—ステイグマと情報についての考察—. 足利大学看護学研究紀要. 10：29-39
- 宮本眞巳（2019）はじめに. 改訂版 看護場面の再構成. 日本看護協会出版社. 東京. 3-7
- 山下真裕子，薮田歩，伊関敏男（2016）シミュレーション教育における精神障がい者のイメージへの影響—本学の精神看護学教育における新たな取り組み—. 神奈川県立保健福祉大学誌. 13：71-8.
- 米元富貴代，信太圭一，小牧祥太郎，矢田浩紀（2022）テキストマイニングを用いた精神看護学実習における学生の学びに関する研究—統合失調症患者、あるいはうつ病患者を受け持った学生のレポート解析—. 帝京大学福岡医療技術学部紀要. 17：21-35.

Report

Learning about self-understanding and understanding of others through process records in psychiatric nursing training

Yoko HASEGAWA¹, Hitoshi ASANO², Maki UEHARA³

¹Department of Nursing, Faculty of Medical and Health Science, Tsukuba International University

²Department of nursing Ibaraki Christian University

³Department of Nursing, Faculty of Medical and Health Science, Tsukuba International University

Abstract

Purpose: This study aims to clarify aspects of the learning of self-understanding and understanding of others obtained through process records during the shortened period of psychiatric nursing training during the COVID-19 pandemic.

Method: A total of 60 process records written by 46 fourth-year students who participated in psychiatric nursing training at University A were analyzed using text mining techniques.

Results: The co-occurrence network of “What I, as a student, understood/did not understand” showed 14 subgraphs, and the co-occurrence network of “overall evaluation” showed 10 subgraphs. The word that was most frequently used was “patients,” and the students looked at the entire interactions with the patients, focused on the patients, and reflected on their interactions with themselves.

Conclusion: The students were able to reflect while focusing on the reactions of patients, consider their own communication tendencies and responses, and gain a perspective of self-understanding. The perspective of self-understanding led to reflection on interactions, broadened the perspective of the situation of patients and background, and led to the perspective of understanding others.

Keywords: self-understanding, understanding of others, process record, text mining, psychiatric nursing training